



● 小石？

—カルイシガニの一種—

これまでアムスルだよりでは、いくつかのカニの仲間を紹介してきました。それぞれにユニークな生き方をしていますが、今回もその一つを紹介しようと思います。

上の写真には、死サンゴの小石にまじって、そのカニが写っているのですが、どれだかわかるでしょうか。答えは、左から2番目の“小石”です。どれも同じような小石に見えますが、手に取ってみると、写真1のように、ちゃんとはさみをもったカニだということがわかります。図鑑で名前を調べてみたところ、どうやらカルイシガニの一種のようです。カルイシガニは、ヒシガニの仲間、この仲間は、体のわりに大きくて長いはさみをもっているの



ので、それを折りたたんでも、ひじを張っているような格好になり、

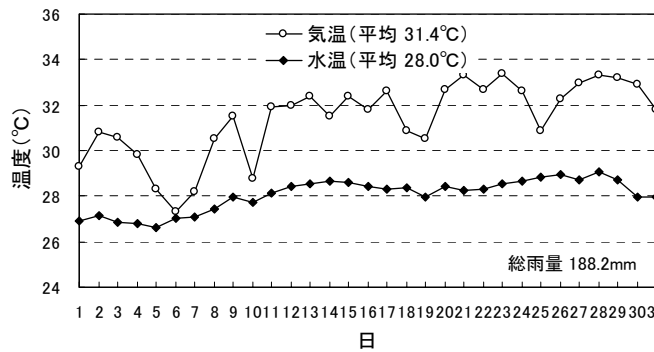
横に長い姿をしています。

人間もカニをよく食べますが、ハリセンボンなどの魚やタコもカニが大好物です。カニにとっては、それだけ食べられてしまう危険が多いということなので、いろいろな方法で身を守ろうとしています。例えば、アサヒガニやカラッパのように砂にもぐったり（アムスルだより5号、57号）、固くて丈夫なサンゴのすき間でくらしたり（同44号）、もっと積極的にキンチャクガニのように毒針のあるイソギンチャクを武器にしたり（同68号）しています。また、ワタリガニの仲間は、一番後ろの脚（あし）がボートのオールのような形をしていて、水中をすばやく泳いで逃げられるようになっています。そして、いくつかのカニは、「擬態」というユニークな方法で身を守っています。

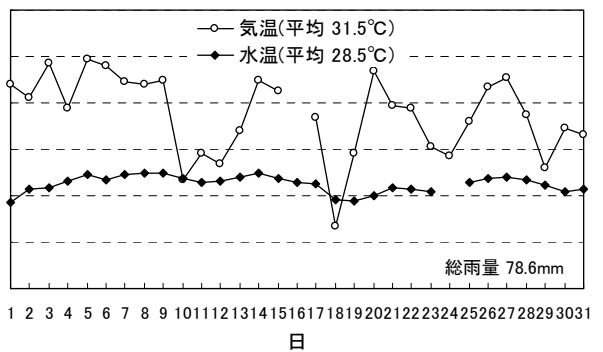
「擬態」とは、生き物が体の色や形を別のものに似せて、他の動物の目をだますことです。カニの仲間では、モクズシヨイやミミズクガニが、カイメンやイソギンチャクモドキを体につけて、海底にカムフラージュすることを以前紹介しました（アムスルだより56号、65号）が、今回のカルイシガニの一種も、この擬態をおこなっているカニの一つでしょう。ごつごつした体の表面の様子や色は、死んだサンゴの小石そのままです（小石のピンクや茶色の点はサンゴモなどの海藻ですが、カニのものが本物の海藻なのかカニ自身の色なのかは、今調べていると

定点観測

2004年7月



2004年8月



ころです)。サンゴ礁には、こうした小石がたくさん落ちているので、敵の目をあざむくためには、うってつけのカムフラージュです。カニをねらった魚が真上を通っても、きっと見つけることができないでしょう。

じつは、同じように小石に擬態したカニをもう一つ見つけました(写真2)。これも、本物そっくりです。きっと、長い歴史の中で、カムフラージュの下手なものは天敵に食べられ、より上手なものだけが生き残って、本物と見まちがうほどの今の姿になったのでしょう。慶良間の海には、これらのほかにも、小石や岩の表面やほかの生き物など、さまざまなものにカムフラージュしたカニたちがたくさんいると思います。見つけるのは大変ですが、発見したときには、その見事さ



写真2

に驚かされるのは間違いありません。みなさんも、一度探してみてもどうでしょうか。

●阿嘉島の海より

9月2日の夜10時頃、クシバルの砂浜におりてみると、すぐ近くにウミガメの足跡を見つけました。ライトを消してそっと足跡をたどって行くと、暗闇の中でバサッ、バサッという音がしています。そのうち暗闇に目が慣れてくると、音の

しているあたりに大きな黒いかたまりが見えてきました。やっぱりウミガメが産卵に来ていたようです。バサッ、バサッという音はアオウミガメが前足で砂を払いのけている音でした。少し離れたところから見てみると、どうやら場所が気に入らなかったようで、また移動し始めました。そして何度かそんな行動を繰り返していましたが、やっと気に入った場所を見つけると、力強い前足で自分の体がすっぽり入る大きな穴(ボディピットという)を掘りました。次に後足を器用に使って卵を産み落とす穴(卵室)を掘っていきました。穴を掘る音がしなくなってからそっと近づいてみると、ピンポン球のような真っ白な卵を産み始めたところでした。間隔をあけて2~3個ずつ卵が産まれてきます。全部でいくつの卵を産んだのかは確認できませんでしたが、産卵を終えたウミガメ



は、また後足を使って卵室を埋め、最後にボディピットを埋め終わると再び体を引きずって月に照らされた海に帰っていきました。時計を見ると午前2時前でした。このウミガメは産卵のために4時間以上も重い体を引きずって砂浜を這い回っていたことになります。あの卵が無事に孵化できることを祈りたい気持ちになりました。